統計分析研究所
株式会社アイスタット
Institute of Statistical Analyses, Inc

2024年2月29日
株式会社アイスタット
News Release

株式会社アイスタット マンスリーレポート
- 薬に関するアンケート（第5回） -
（調査期間：2024年2月15日）

最近は病医院の処方箋薬と市販薬に同じ成分の薬も多く、さらにコロナ禍以来、医療機関を遠のく人もみられ、「薬をもらうなら病医院へ」の常識が変わりつつあるようです。また、薬不足、オーバードーズなど薬に関する深刻な問題も発生しています。一般市民のジェネリック医薬品（後発品）の服用状況や飲み切らなかった処方箋薬の扱いなども気になるところです。これらの実態を知る目的として、株式会社アイスタット（本社：東京都杉並区、代表取締役社長：志賀保夫）は、薬に関するアンケート調査を実施しました。2016年5月の第1回に続き、第2回目となります。

本調査は、業界最大規模のモニター数を誇るセルフ型アンケートツール「Freeasy」を提供するアイブリッジ株式会社（本社：大阪府大阪市） の会員 20 歳～69 歳を対象に調査を実施しました。

調査結果サマリー

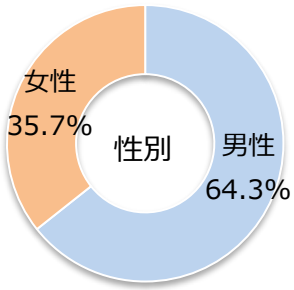
- **最近1年間で処方箋薬を服用した人は6割近く！ 年代が高くなるほど服用率が多い！**
- **最近1年間で市販薬を服用した人は6割を超える！ 40代の服用が最多！**
- **「体調が悪い時、改善したい時」の薬の服用割合は、処方箋薬より市販薬の方が多い！**
- **最近1年間で「処方箋薬」「市販薬」の両方を服用している「併用型」の人は4割！**
- **日本国内で薬不足が深刻な問題になっている中、実際に薬不足を感じている人は2割！**
- **処方箋薬を処方された人（280名）のうち、飲み切らない人は約8割！**
  飲み切らない人（218名）のうち、再発時に残った薬を服用する人は8割、捨てる人は2割！
  残った薬の使用期限は、「処方日から1年未満であれば再発時に服用する」が最多！
- **ジェネリック医薬品（後発品）を拒否する人は1割弱！**
- **オーバードーズについて「問題である」と思っている人は7割！**
- **37.5℃以上の発熱ではじめにすること第1位は「市販薬で様子を見る」**

調査概要

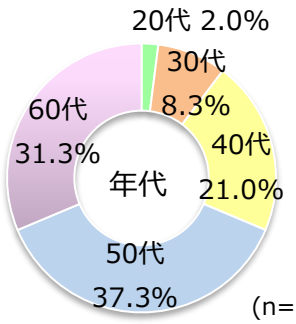
形式	Webアンケート形式
調査期間	2024年2月15日
回答者	セルフ型アンケートツールFreeasyに登録している20歳～69歳の会員300人
調査機関	株式会社アイスタット

【回答者属性】

全体		300名	100.0%
性別	男性	193名	64.3%
	女性	107名	35.7%
年代	20代	6名	2.0%
	30代	25名	8.3%
	40代	63名	21.0%
	50代	112名	37.3%
	60代	94名	31.3%
有無婚姻	未婚	129名	43.0%
	既婚	171名	57.0%
居住地	北海道・東北地方	32名	10.7%
	関東地方	117名	39.0%
	中部地方	49名	16.3%
	近畿地方	60名	20.0%
	四国・中国・九州地方・沖縄	42名	14.0%
職業	会社員(正社員)	97名	32.3%
	会社員（契約・派遣社員）	18名	6.0%
	経営者・役員	7名	2.3%
	公務員（教職員を除く）	6名	2.0%
	自営業	24名	8.0%
	自由業	13名	4.3%
	医師・医療関係者	2名	0.7%
	専業主婦	33名	11.0%
	学生	3名	1.0%
	パート・アルバイト	32名	10.7%
	無職	57名	19.0%
	その他	8名	2.7%

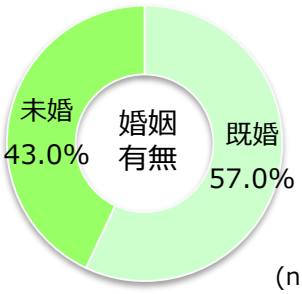


(n=300)



(n=300)

平均年齢（53.3才）



(n=300)

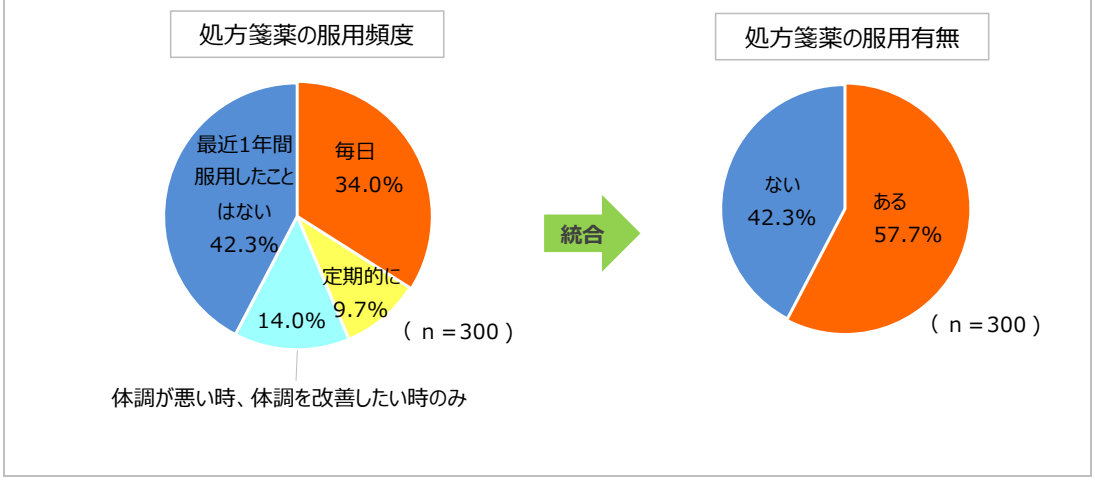
主な分析結果

最近1年間で処方箋薬を服用した人は6割近く！　年代が高くなるほど服用率が多い！

最近1年間のうち、病医院で処方された薬（処方箋薬）をどのくらいの頻度で服用したか聞いたところ、「服用したことはない」の42.3%が最も多く、次に「毎日」の34.0%、「体調が悪い時、体調を改善したい時のみ」の14.0%、「定期的に」の9.7%と続いた。この回答を服用有無別に統合すると、最近1年間で処方箋薬の服用がある人は6割近くいることが明らかとなった。

年代別でみると、服用有無で「ある」を回答した人は「60代」で最も多く、年代が高くなるにつれ服用率が多い傾向がみられた。また、「60代」で「毎日服用」を回答した人は5割近く（45.7%）で、2人のうち1人が処方箋薬に頼らざるを得ないことがうかがえた。

【図1】あなたは最近1年間のうち、病医院で処方された薬（処方箋薬）をどのくらいの頻度で服用しましたか。内服薬（薬を飲む）、外服薬（体の外側にぬる・貼る）に関わらず、お知らせください。（回答は1つ）



（横%表）

		処方箋薬の服用頻度				n	処方箋薬の服用有無		n
		毎日	定期的に	体調が悪い時、改善したい時のみ	最近1年間、服用したことはない		ある	ない	
全体		34.0	9.7	14.0	42.3	300	57.7	42.3	300
年代	20代・30代	9.7	16.1	12.9	61.3	31	38.7	61.3	31
	40代	28.6	3.2	15.9	52.4	63	47.6	52.4	63
	50代	33.9	10.7	15.2	40.2	112	59.8	40.2	112
	60代	45.7	10.6	11.7	31.9	94	68.1	31.9	94
性別	男性	35.2	8.8	12.4	43.5	193	56.5	43.5	193
	女性	31.8	11.2	16.8	40.2	107	59.8	40.2	107
居住地	北海道・東北地方	37.5	9.4	15.6	37.5	32	62.5	37.5	32
	関東地方	35.0	12.0	12.8	40.2	117	59.8	40.2	117
	中部地方	34.7	10.2	12.2	42.9	49	57.1	42.9	49
	近畿地方	33.3	1.7	18.3	46.7	60	53.3	46.7	60
	四国・中国・九州地方・沖縄	28.6	14.3	11.9	45.2	42	54.8	45.2	42

各項目を縦に見て最大値に彩色　　各項目を縦に見て最大値に彩色

▼ 独立性の検定 （カイ2乗検定）

処方箋薬の服用有無×年代

p値	判定	相関
0.009	[**]	0.1963

処方箋薬の服用有無×性別

p値	判定	相関
0.575	[ ]	0.0323

処方箋薬の服用有無×居住地

p値	判定	相関
0.887	[ ]	0.0617

相関：クラメール連関係数 ↑

独立性の検定 ➡ クロス集計を行った結果が、母集団においても関連性があるといえるかを調べる。判定[*]は、母集団に関連性があるといえる。

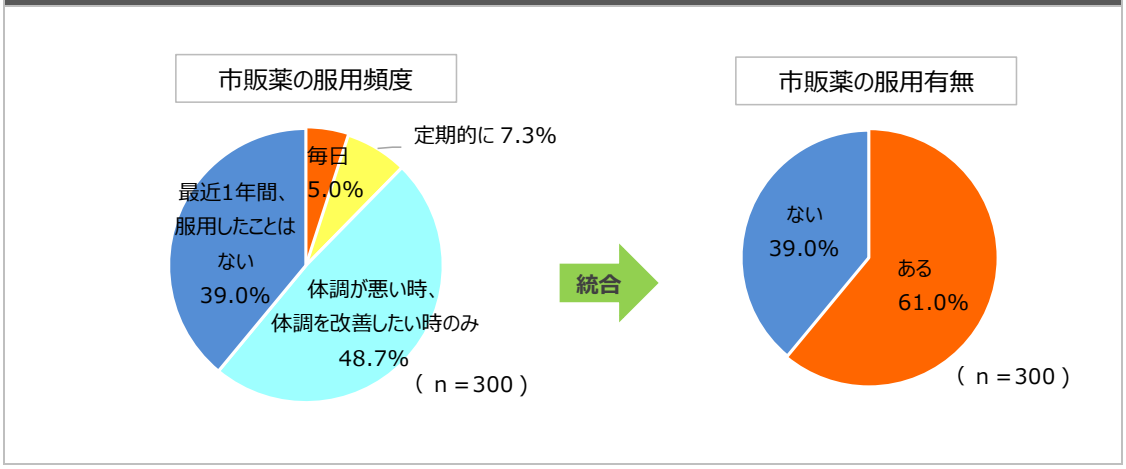
クラメール連関係数（相関） ➡ 行項目と列項目の関連の強さを示す指標で、0.1以上は2項目間に相関（関連）があるといえる。

最近1年間で市販薬を服用した人は6割を超える！　40代の服用が最多！

最近1年間のうち、ドラッグストアなどの店頭で購入した薬（市販薬）をどのくらいの頻度で服用したか聞いたところ、「体調が悪い時、体調を改善したい時のみ」が48.7%で最も多く、次に「服用したことはない」の39.0%、「定期的に」の7.3%、「毎日」の5.0%と続いた。
この回答を服用有無別に統合すると、最近1年間で市販薬を服用した人は6割を超えることが明らかとなった。

年代別でみると、服用有無で「ある」を回答した人は「40代」で最も多かった。

【図2】 あなたは最近1年間のうち、ドラッグストアなどの店頭で購入した薬をどのくらいの頻度で服用しましたか
内服薬（薬を飲む）、外服薬（体の外側にぬる・貼る）に関わらず、お知らせください。（回答は1つ）



(横%表)

		市販薬の服用頻度					市販薬の服用有無		
		毎日	定期的に	体調が悪い時、改善したい時のみ	最近1年間、服用したことはない	n	ある	ない	n
全体		5.0	7.3	48.7	39.0	300	61.0	39.0	300
年代	20代・30代	6.5	6.5	35.5	51.6	31	48.4	51.6	31
	40代	7.9	7.9	49.2	34.9	63	65.1	34.9	63
	50代	4.5	8.0	51.8	35.7	112	64.3	35.7	112
	60代	3.2	6.4	48.9	41.5	94	58.5	41.5	94
性別	男性	4.1	7.3	50.3	38.3	193	61.7	38.3	193
	女性	6.5	7.5	45.8	40.2	107	59.8	40.2	107
居住地	北海道・東北地方	9.4	6.3	46.9	37.5	32	62.5	37.5	32
	関東地方	2.6	11.1	50.4	35.9	117	64.1	35.9	117
	中部地方	6.1	4.1	59.2	30.6	49	69.4	30.6	49
	近畿地方	8.3	3.3	33.3	55.0	60	45.0	55.0	60
	四国・中国・九州地方・沖縄	2.4	7.1	54.8	35.7	42	64.3	35.7	42

各項目を縦に見て最大値に彩色　　各項目を縦に見て最大値に彩色

▼ 独立性の検定 （カイ2乗検定）

市販薬の服用有無×年代

p値	判定	相関
0.352	[ ]	0.1044

市販薬の服用有無×性別

p値	判定	相関
0.754	[ ]	0.0181

市販薬の服用有無×居住地

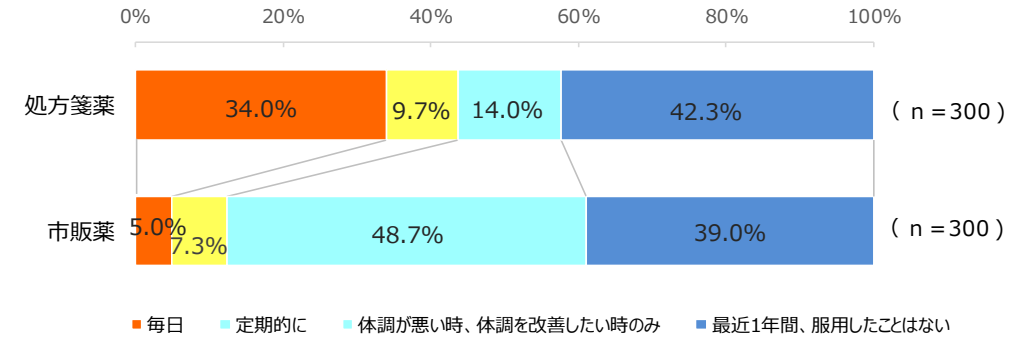
p値	判定	相関
0.072	[ ]	0.1693

相関：クラメール連関係数 ↑

最近1年間の薬の服用割合は、「処方箋薬」より「市販薬」の方が多い！

「処方箋薬の服用」「市販薬の服用」の回答状況を比較した。
「毎日」「定期的に」の服用割合は「処方箋薬」の方が多く、「体調が悪い時、体調を改善したい時のみ」の服用割合は「市販薬」の方が多い結果であったものの、「服用したことはない」を除いた合計でみると、「処方箋薬」は57.7%、「市販薬」は61.0%で、「処方箋薬」より「市販薬」の方が多いことが明らかとなった。最近は病医院の処方箋薬と市販薬で同じ成分の薬も多いことから、市販薬を購入して対処している人が増えているようだ。

【図3】「処方箋薬」と「市販薬」の服用状況



最近1年間で「処方箋薬」「市販薬」の両方を服用している「併用型」の人は4割！

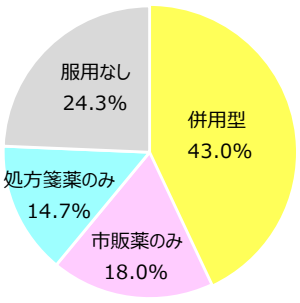
「処方箋薬の服用」「市販薬の服用」の回答状況から、300名の薬の服用タイプを作成した。「処方箋薬」「市販薬」の両方を服用している「併用型」の人は43.0%、病医院を受診せずに「市販薬のみ」で対処する人は18.0%、「処方箋薬のみ」で対処する人は14.7%、「服用なし」の人は24.3%で、「併用型」が最も多かった。

【図4】 薬の服用タイプ

n＝300（全%）		市販薬 毎日	定期的に	体調が悪い時	服用なし
処方箋薬	毎日	3.7%	1.3%	18.3%	10.7%
	定期的に	0.3%	4.3%	3.0%	2.0%
	体調が悪い時	1.0%	0.3%	10.7%	2.0%
	服用なし	0.0%	1.3%	16.7%	24.3%

※ 枠内を合計すると100%になる

統合



（n＝300）

日本国内で薬不足が深刻な問題になっている中、実際に薬不足を感じている人は2割！

最近1年間のうち、薬不足を感じたことがあるかを全員（300名）に聞いたところ、「薬不足を感じた」は17.7%、「薬不足を感じなかった」は82.3%であった。

次に、薬を必要とする人（205名）のみを抽出し、薬不足を感じたことがあるかを調べた。「薬不足を感じたことはなかった」は79.5%、「薬不足を感じた」は20.5%の結果であった。薬不足を感じた人の内訳は、「ドラッグストアなどの店頭のみ感じた」が7.3%、「病医院の処方箋薬のみ感じた」が6.8%、「両方で感じた」が6.3%となる。

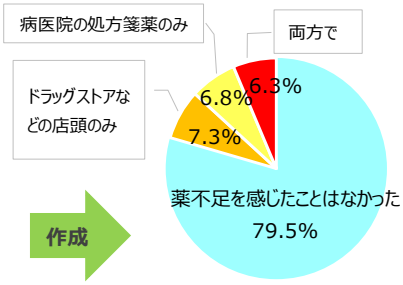
日本国内の医療機関や薬局では今、「薬不足」が深刻な問題となっている。医療機関や薬局がその対応に尽力しているが、それでも10人に2人が「薬不足」を経験していることが明らかとなった。

【図5】 最近1年間のうち、あなた自身が「薬不足」を感じたことはありますか。（回答は1つ）

全員の回答（n＝300）

	n	%	
薬を必要とする機会があり、「病医院の処方箋薬」「ドラッグストアの店頭」の両方で感じた	13	4.3%	薬不足を感じた（17.7%）
薬を必要とする機会があり、ドラッグストアなどの店頭のみ感じた	15	5.0%	
薬を必要とする機会があり、病医院の処方箋薬のみ感じた	14	4.7%	
薬を必要とする機会がないが、感じた・見聞きした	11	3.7%	
薬を必要とする機会があったが、感じたことはなかった	163	54.3%	薬不足を感じなかった（82.3%）
薬を必要とする機会がないので、感じたことはなかった	84	28.0%	

薬を必要とする人の回答（n＝205）



(横%表)

		薬不足を感じているか						n	薬不足を感じているか		n
		「病医院の処方箋」「ドラッグストアの店頭」の両方で	ドラッグストアなどの店頭のみ	病医院の処方箋のみ	薬を必要とする機会がないが、薬不足見聞きした	薬を必要とする機会があったが、薬不足を感じたことはなかった	薬を必要とする機会がないので、薬不足を感じたことはなかった		感じた	感じなかった	
全体		4.3	5.0	4.7	3.7	54.3	28.0	300	17.7	82.3	300
年代	20代・30代	0.0	6.5	3.2	3.2	48.4	38.7	31	12.9	87.1	31
	40代	6.3	7.9	4.8	4.8	46.0	30.2	63	23.8	76.2	63
	50代	6.3	4.5	4.5	3.6	55.4	25.9	112	18.8	81.3	112
	60代	2.1	3.2	5.3	3.2	60.6	25.5	94	13.8	86.2	94
性別	男性	4.1	3.6	4.7	3.1	58.0	26.4	193	15.5	84.5	193
	女性	4.7	7.5	4.7	4.7	47.7	30.8	107	21.5	78.5	107
居住地	北海道・東北地方	3.1	3.1	3.1	6.3	68.8	15.6	32	15.6	84.4	32
	関東地方	6.8	6.8	6.8	3.4	52.1	23.9	117	23.9	76.1	117
	中部地方	4.1	4.1	6.1	4.1	65.3	16.3	49	18.4	81.6	49
	近畿地方	1.7	5.0	1.7	1.7	38.3	51.7	60	10.0	90.0	60
	四国・中国・九州地方・沖縄	2.4	2.4	2.4	4.8	59.5	28.6	42	11.9	88.1	42

表側項目内を縦に見て最大に彩色

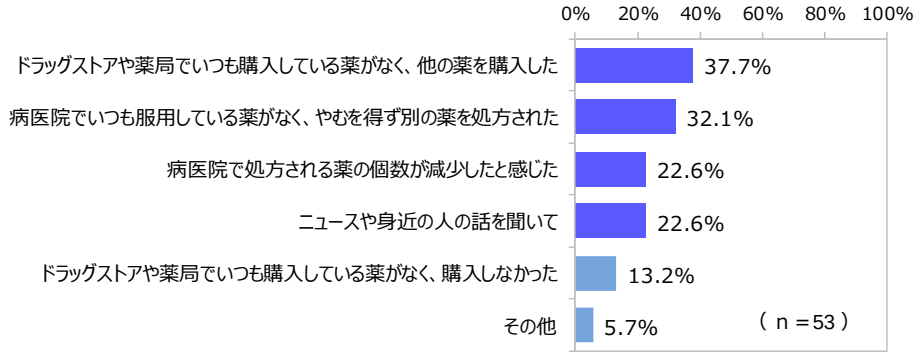
各項目を縦に見て最大値に彩色

薬不足を感じた理由の第1位は、
「ドラッグストアや薬局でいつも購入している薬がなく、他の薬を購入した」

「薬不足を感じた」を回答した53名にその理由を聞いたところ、「ドラッグストアや薬局でいつも購入している薬がなく、他の薬を購入した」が37.7%で最も多く、次に「病医院でいつも服用している薬がなく、やむを得ず別の薬を処方された」の32.1%、「病医院で処方される薬の個数が減少したと感じた」「ニュースや身近の人の話を聞いて」が同率で22.6%と続いた。

＜「薬不足を感じた」を回答した53名が対象＞

【図6】 最近1年間のうち、あなたが「薬不足」を感じた理由をお知らせください。 （回答はいくつでも）



(横%表)

		薬不足を実感した理由						n
		ドラッグストアや薬局でいつも購入している薬がなく、他の薬を購入した	病医院でいつも服用している薬がなく、やむを得ず別の薬を処方された	病医院で処方される薬の個数が減少したと感じた	ニュースや身近の人の話を聞いて	ドラッグストアや薬局でいつも購入している薬がなく、購入しなかった	その他	
全体		37.7	32.1	22.6	22.6	13.2	5.7	53
年代	20代・30代	75.0	25.0	0.0	0.0	25.0	0.0	4
	40代	40.0	46.7	20.0	20.0	13.3	6.7	15
	50代	33.3	33.3	23.8	33.3	19.0	0.0	21
	60代	30.8	15.4	30.8	15.4	0.0	15.4	13
性別	男性	36.7	30.0	23.3	20.0	20.0	10.0	30
	女性	39.1	34.8	21.7	26.1	4.3	0.0	23
居住地	北海道・東北地方	20.0	40.0	0.0	60.0	20.0	0.0	5
	関東地方	39.3	35.7	21.4	14.3	3.6	3.6	28
	中部地方	44.4	44.4	33.3	22.2	22.2	0.0	9
	近畿地方	16.7	16.7	0.0	33.3	16.7	33.3	6
	四国・中国・九州地方・沖縄	60.0	0.0	60.0	20.0	40.0	0.0	5

表側項目内を縦に見て最大に彩色　　n＝30未満は参考値

処方箋薬を処方された人（280名）のうち、飲み切らない人は約8割！
飲み切らない人（218名）のうち、再発時に残った薬を服用する人は8割、捨てる人は2割！
残った薬の使用期限は、「処方日から1年未満であれば再発時に服用する」が最多！

基本的に処方箋薬は処方された日数分を飲み切るものなので、薬が余ってしまうことはあまり起こらないと思うが、もし余った場合、処方箋の飲み薬は使用期限がほとんど記載されていないことから、薬剤師の指導または自己責任での服用となる。

そこで、飲み切らなかった処方箋薬はどのようにしているかを聞いた。まず初めに、「今まで飲み薬を処方されたことはない」を回答した20名を除いた280名を対象に処方箋薬の「飲み切り状況」を調べてみると、処方箋薬を「飲み切らない人」は77.9%、「今まで残したことはない」は22.1%で、処方箋薬を飲み切らない人は約8割と意外に多いことが明らかとなった。

次に、処方箋薬を飲み切らない人（218名）を対象に残った薬はどうするかを調べてみると、再発時に残った薬を服用する人は8割、捨てる人は2割であることが明らかとなった。さらに、残った薬の使用期限を調べてみると、「処方日から1年未満であれば再発時に服用する」が27.5%で最も多く、次に「処方日から3年以上でも服用する」の17.0%と続いた。

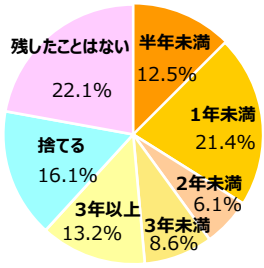
なお、一般的に処方箋薬の使用期限の目安は「未開封の状態」で「適切な条件下で保管」した場合に限り、製造から3年～5年とされているようです。

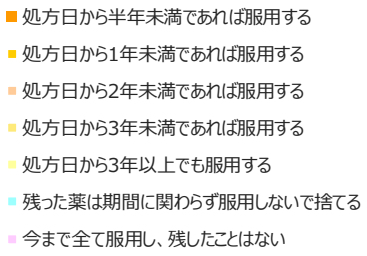
【図7】 病医院や薬局で処方された飲み薬は、ほとんど使用期限が記載されていません。
あなたは、病医院や薬局で処方された飲み薬を全て服用しなかった場合、その薬はどのようにしていますか。
薬の種類によって異なる場合は、最もあてまるものをお知らせください。 （回答は1つ）

▼ 回答者300名のうち、「今まで病院や薬局で飲み薬を処方されたことはない」を回答した20名を除いた結果を表記

処方箋薬の飲み切り状況

（ n＝280 ）

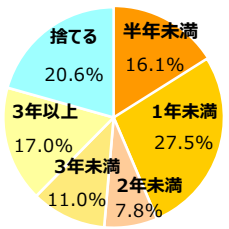




▼ 左記の円グラフより「残したことはない」を回答した62名を除いた結果を表記

「飲み切らない人」のみ対象

（n＝218）



（横%表）

		残った処方箋薬の扱い		n
		飲み切らない	残したことはない	
全体		77.9	22.1	280
年代	20代・30代	89.3	10.7	28
	40代	67.2	32.8	58
	50代	80.2	19.8	106
	60代	78.4	21.6	88

表側項目内を縦に見て最大に彩色

（横%表）

		残った処方箋薬の扱い						n
		半年未満	1年未満で	2年未満で	3年未満	3年以上	捨てる	
全体		16.1	27.5	7.8	11.0	17.0	20.6	218
年代	20代・30代	16.0	32.0	8.0	8.0	4.0	32.0	25
	40代	17.9	35.9	10.3	12.8	15.4	7.7	39
	50代	20.0	27.1	4.7	10.6	16.5	21.2	85
	60代	10.1	21.7	10.1	11.6	23.2	23.2	69

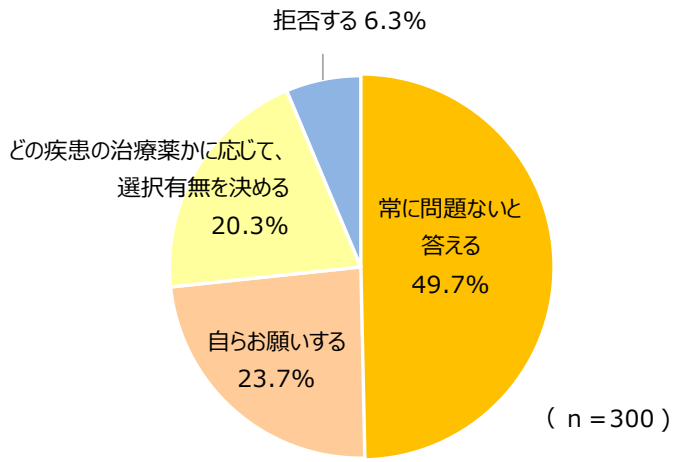
表側項目内を縦に見て最大に彩色

ジェネリック医薬品（後発品）を拒否する人は1割弱！

病医院や薬局でジェネリック医薬品（後発品）を薦められた場合、どのように回答するか聞いたところ、「常に問題ないと答える」が49.7%で最も多く、次に「自らお願いする」の23.7%、「どの疾患の治療薬かに応じて、選択有無を決める」の20.3%、「拒否する」の6.3%と続いた。

厚生労働省はジェネリック医薬品（後発品）使用の推奨を続けており、近年の使用割合（全国平均）は政府目標をほぼ達成したとの情報もある。今回の調査結果からも拒否する人は１割弱で、浸透していることが示される結果となった。

【図8】 あなたは、病医院や薬局でジェネリック医薬品（後発品）を薦められた場合、どのように回答しますか。 （回答は1つ）



(横%表)

		ジェネリック医薬品（後発品）を推奨された時				n
		常に問題ないと答える	自らお願いする	どの疾患の治療薬かに応じて選択有無を決める	拒否する	
全体		49.7	23.7	20.3	6.3	300
年代	20代・30代	41.9	12.9	29.0	16.1	31
	40代	36.5	30.2	28.6	4.8	63
	50代	61.6	19.6	16.1	2.7	112
	60代	46.8	27.7	17.0	8.5	94
性別	男性	53.4	22.8	16.6	7.3	193
	女性	43.0	25.2	27.1	4.7	107
居住地	北海道・東北地方	43.8	25.0	28.1	3.1	32
	関東地方	48.7	24.8	17.9	8.5	117
	中部地方	57.1	14.3	20.4	8.2	49
	近畿地方	55.0	30.0	13.3	1.7	60
	四国・中国・九州地方・沖縄	40.5	21.4	31.0	7.1	42

表側項目内を縦に見て最大に彩色

▼ 独立性の検定 （カイ2乗検定）

ジェネリック医薬品（後発）× 年代

p値	判定	相関
0.007	[**]	0.1590

ジェネリック医薬品（後発）× 性別

p値	判定	相関
0.105	[ ]	0.1430

ジェネリック医薬品（後発）× 居住地

p値	判定	相関
0.319	[ ]	0.1235

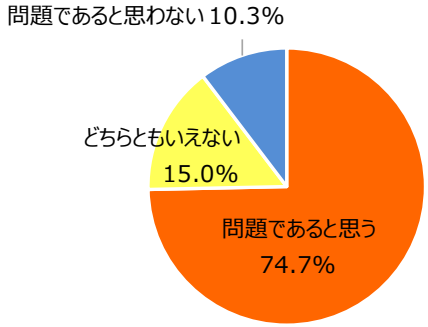
相関：クラメール連関係数 ↑

オーバードーズについて「問題である」と思っている人は7割！

「オーバードーズ」についてどのように思うか聞いたところ、「問題である」が74.7%で最も多く、次に「どちらともいえない」の15.0%、「問題であると思わない」の10.3%と続いた。「オーバードーズ」とは、薬を使うときの一回あたりの用量（dose）が過剰である（over）、または薬物の過剰摂取に及ぶ行為のことをさし、今、若者たちの間で市販薬のオーバードーズが急増しているようで、社会問題となりつつあります。

年代別でみると、「問題である」を回答した人は「50代」で最も多かった。その一方、「問題であると思わない」を回答した人は、「20代・30代」の若者世代で最も多かった。

【図9】 オーバードーズとは「薬の過剰摂取」のことです。
あなたは、「オーバードーズ」についてどのように思いますか。（回答は1つ）



(n=300)

	n	%
とても問題であると思う	136	45.3
やや問題であると思う	88	29.3
どちらともいえない	45	15.0
あまり問題であると思わない	15	5.0
全く問題であると思わない	16	5.3
合 計	300	100.0

(横%表)

		オーバードーズについて			n
		問題であると思う	どちらともいえない	問題であると思わない	
	全体	74.7	15.0	10.3	300
年代	20代・30代	71.0	9.7	19.4	31
	40代	63.5	23.8	12.7	63
	50代	80.4	12.5	7.1	112
	60代	76.6	13.8	9.6	94
性別	男性	75.6	15.5	8.8	193
	女性	72.9	14.0	13.1	107
居住地	北海道・東北地方	78.1	6.3	15.6	32
	関東地方	75.2	13.7	11.1	117
	中部地方	73.5	20.4	6.1	49
	近畿地方	68.3	20.0	11.7	60
	四国・中国・九州地方・沖縄	81.0	11.9	7.1	42

表側項目内を縦に見て最大に彩色

▼ 独立性の検定 （カイ2乗検定）

オーバードーズについて × 年代

p値	判定	相関
0.126	[ ]	0.1290

オーバードーズについて × 性別

p値	判定	相関
0.498	[ ]	0.0682

オーバードーズについて × 居住地

p値	判定	相関
0.548	[ ]	0.1072

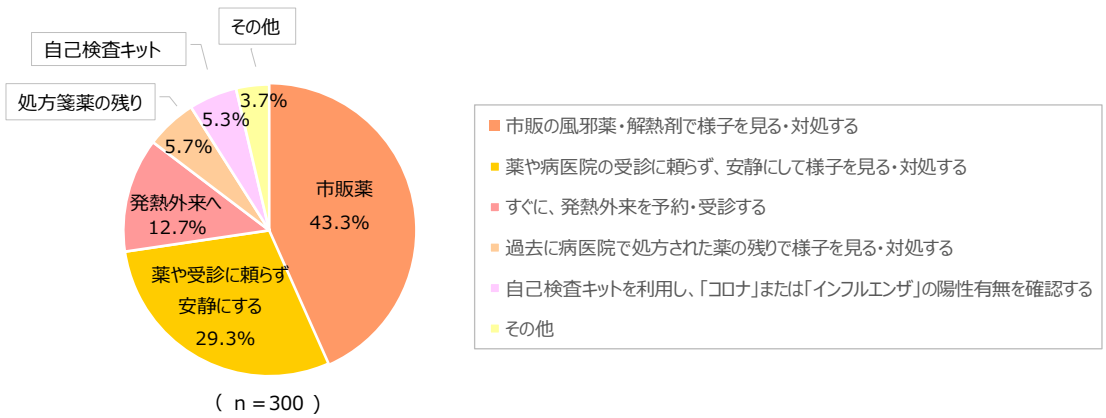
相関：クラメール連関係数 ↑

37.5℃以上の発熱ではじめにすること第1位は「市販薬で様子を見る」

37.5℃以上の発熱をした場合、はじめにすることを聞いたところ、「市販の風邪薬・解熱剤で様子を見る・対処する」が43.3%で最も多く、次に「薬や病医院の受診に頼らず、安静にして様子を見る・対処する」の29.3%、「すぐに、発熱外来を予約・受診する」の12.7%の順で続いた。

年代別でみると、「20代・30代」ほど「自己検査キット」「発熱外来へ」が多く、「50代」ほど「市販薬」「処方箋薬の残り」が多く、「60代」ほど「薬や受診に頼らず、安静にする」が多い結果であった。

【図10】 今、あなたが37.5℃以上の発熱をした場合、はじめにすることをお知らせください。（回答は1つ）



（ n＝300 ）

(横%表)　　並び替え：①年代の彩色ごと　②「全体の値」から「彩色の値」を差し引いた値の降順

		37.5℃以上の発熱で、はじめにすること						n
		自己検査キット	発熱外来へ	市販薬	処方箋薬の残り	薬や受診に頼らず、安静にする	その他	
全体		5.3	12.7	43.3	5.7	29.3	3.7	300
年代	20代・30代	16.1	16.1	35.5	6.5	19.4	6.5	31
	40代	7.9	14.3	41.3	4.8	27.0	4.8	63
	50代	3.6	8.9	47.3	8.0	30.4	1.8	112
	60代	2.1	14.9	42.6	3.2	33.0	4.3	94
性別	男性	7.3	10.9	44.6	5.7	26.4	5.2	193
	女性	1.9	15.9	41.1	5.6	34.6	0.9	107
居住地	北海道・東北地方	9.4	15.6	43.8	3.1	28.1	0.0	32
	関東地方	5.1	12.0	46.2	6.8	26.5	3.4	117
	中部地方	6.1	6.1	38.8	8.2	38.8	2.0	49
	近畿地方	1.7	15.0	38.3	5.0	31.7	8.3	60
	四国・中国・九州地方・沖縄	7.1	16.7	47.6	2.4	23.8	2.4	42

表側項目内を縦に見て最大に彩色

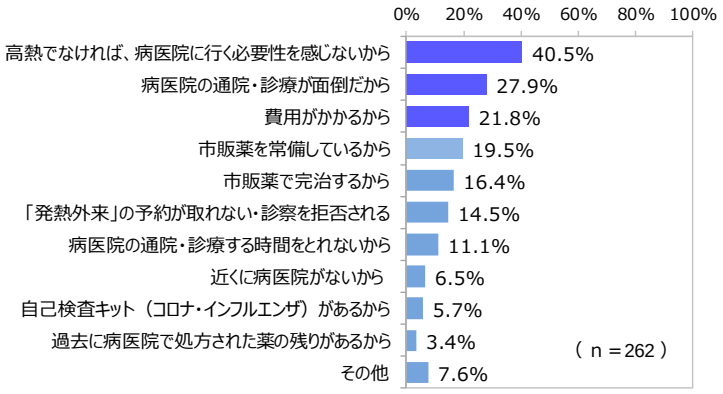
「すぐに発熱外来」を受診しない理由の第1位は「高熱でないから」、第2位は「面倒」

37.5℃以上の発熱をしても「すぐに発熱外来に行かない人（262名）」に、その理由を複数回答で聞いたところ、「高熱でなければ、病医院に行く必要性を感じないから」が40.5%で最も多く、次に「病医院の通院・診療が面倒だから」の27.9%、「費用がかかるから」の21.8%の順で続いた。

コロナ禍以来、風邪の症状で医療機関を受診する場合、「発熱外来」に行かなければならなくなり、居住地によっては「すぐに予約が取れない・診察を拒否される」といったケースも聞く。しかし、今回の調査では「予約が取れない・診察を拒否される」を理由とする回答が14.5%で、受診しない理由の第6位であった。上位5番目までの回答に着目すると、あらためて「薬をもらうなら病医院へ」の常識が変わりつつあることを実感した。

＜ 前問で「すぐに、発熱外来を予約・受診する」以外を回答した262名が対象 ＞

【図11】 新型コロナの流行以降は、風邪の症状があって医療機関を受診するなら「発熱外来」に行かなければならなくなりました。あなたが37.5℃以上の発熱をした場合、「すぐに発熱外来を受診しない」理由をお知らせください。（回答はいくつでも）



(横%表)　　並び替え：①居住地の彩色ごと　②「全体の値」から「彩色の値」を差し引いた値の降順

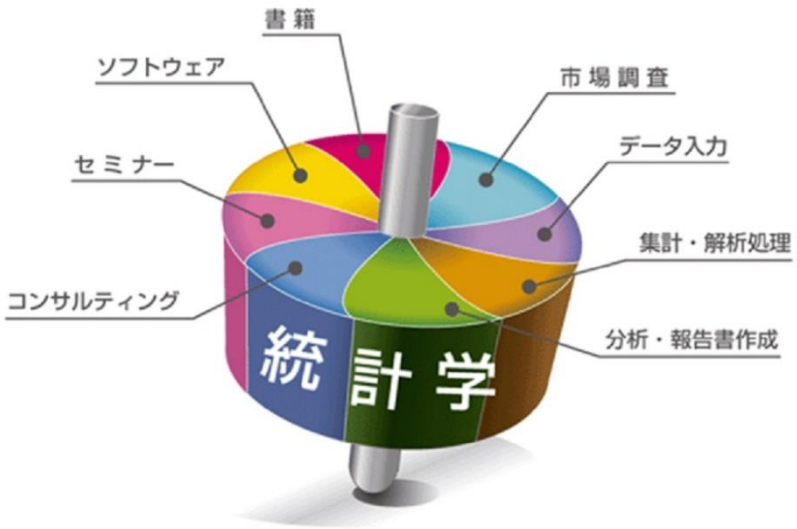
		すぐに発熱外来を受診しない理由											
		病医院の通院・診療する時間をとれないから	市販薬を常備しているから	高熱でなければ、病医院に行く必要性を感じないから	自己検査キット（コロナ・インフルエンザ）があるから	病医院の通院・診療が面倒だから	「発熱外来」の予約が取れない・診察を拒否される	過去に病医院で処方された薬の残りがあるから	近くに病医院がないから	費用がかかるから	市販薬で完治するから	その他	n
	全体	11.1	19.5	40.5	5.7	27.9	14.5	3.4	6.5	21.8	16.4	7.6	262
年代	20代・30代	11.5	19.2	23.1	3.8	15.4	15.4	3.8	3.8	42.3	19.2	7.7	26
	40代	14.8	14.8	37.0	1.9	27.8	20.4	0.0	7.4	22.2	13.0	11.1	54
	50代	13.7	22.5	45.1	4.9	28.4	14.7	4.9	9.8	23.5	16.7	6.9	102
	60代	5.0	18.8	42.5	10.0	31.3	10.0	3.8	2.5	12.5	17.5	6.3	80
性別	男性	9.9	19.8	41.3	3.5	29.1	12.2	4.1	5.8	23.8	18.6	8.1	172
	女性	13.3	18.9	38.9	10.0	25.6	18.9	2.2	7.8	17.8	12.2	6.7	90
居住地	北海道・東北地方	33.3	29.6	48.1	7.4	22.2	14.8	3.7	3.7	22.2	11.1	3.7	27
	関東地方	8.7	23.3	42.7	5.8	34.0	17.5	4.9	4.9	21.4	13.6	7.8	103
	中部地方	10.9	17.4	28.3	6.5	28.3	17.4	4.3	8.7	23.9	17.4	6.5	46
	近畿地方	7.8	15.7	39.2	5.9	21.6	3.9	2.0	7.8	21.6	15.7	13.7	51
	四国・中国・九州地方・沖縄	5.7	8.6	45.7	2.9	22.9	17.1	0.0	8.6	20.0	28.6	2.9	35

表側項目内を縦に見て最大に彩色　　ｎ＝30未満は参考値

サマリーレポートはこちらを参照ください。
https://istat.co.jp/investigation/2024/02/result

統計分析研究所　株式会社アイスタットについて

【株式会社アイスタット（統計分析研究所）会社概要】
◇所在地　　〒166-0011　東京都杉並区梅里1-22-26 パラドール東高円寺3F（旧YTビル）
◇設立　　2011年6月2日
◇代表者　　代表取締役社長　志賀　保夫　/　代表取締役会長　菅　民郎
◇事業内容　　株式会社アイスタット(統計分析研究所)は、統計学 を礎とした情報サービス業 に従事しています。
◆本調査・弊社事業などに関するお問合せ先◆
統計分析研究所　株式会社アイスタット　https://istat.co.jp/
総務部　橋本 有子（somu@istat.jp）TEL: 03-3315-7637/FAX: 03-3315-7660

サービスのご案内

株式会社アイスタット(統計分析研究所)は、統計学 を礎とした情報サービス業 に従事しています。 「わかりやすい統計学」をモットーに、 8つのコア・サービスをみなさまにご提供いたします。